関西大学『独逸文学』第53号 2009年3月

国際ゲルマニスト会議(2010)に向けて

IVG紹介と私の発表計画

武 市 修

1. IVGについて

1951年にイタリアのフローレンスで開かれた国際近代言語文学連盟(Féderation Internationale des Langues et Littératures Modernes)において、国際ゲルマニスト協会(Internationale Vereinigung für Germanistik = IVG)の設立が決定された。そしてIVGによって5年に一度国際ゲルマニスト会議が開催されることになり、その第1回大会が1955年ローマにおいて開かれた。以後5年ごとに世界中の異なった国で開催されるという原則に従い、デンマークのコペンハーゲン、オランダのアムステルダム、アメリカのプリンストン、イギリスのケンブリッジ、スイスのバーゼルを回ったあとゲルマニスティクの本国ドイツで開かれたのは、ようやく30年後の1985年ゲッティンゲンにおける第7回大会であった。それに続いて1990年アジアで初めて東京で第8回大会が行われたあと、カナダのバンクーバー、オーストリアのウィーン、フランスのパリを経て、今回2010年に7月30日から8月7日までポーランドのワルシャワで第12回大会が開催され、また5年ぶりに世界各地からゲルマニストが集まることになっている。

1956年当時23ヵ国192人であったIVGの会員数は、2000年には61ヵ国1700人へと、ほぼ9倍にまで増えている。IVGはゲルマニスティクの分野における国際的な協力を促進することを目的とし、国際会議で扱われるテーマも会員数の増加につれて大きく拡大してきた。第1回ローマ大会では「標準語と方言」(Hochsprache und Mundarten)と「19世紀における文学」(Die Literatur im 19. Jahrhundert)のわずかふたつのセクションで39の報告が行われたに過ぎず、参加者も192人であったのが、40

年後のバンクーバー大会では38のセクションに610の報告と大幅に増加している。

IVG の国際会議では、ドイツ語のみならずオランダ語、フリース語、アフリカーンス語、スカンディナヴィア諸語、イディッシュ語における語学・文学の共時的、通時的な諸現象および実用と教授法上の諸問題が扱われ、今回のポーランド大会では第１セクションの「ドイツ語による政治小説」(Der deutschsprachige politische Roman) から最後の「ドイツ・ポーランドの思い出の場所」(Deutsch-polnische Erinnerungsorte) まで63ものセクションが用意され、申込み期間が延長されて2009年の３月中旬まで受け付けられる。どれだけの報告が行われ、どれだけのゲルマニストが世界各地から集まってくるのか私には予想もできない。

この大会の第33セクションは「言語変遷の通時的、地域・社会層的、類型論的局面」(Diachronische, diatopische und typologische Aspekte des Sprachwandels) をテーマとする。ここでは、とりわけ文法的変遷の観点から、歴史的視点に立ったゲルマン言語学と言語体系のあらゆるレヴェルにおける言語変遷に関わる研究成果およびアクチュアルな問題を中心に、文法、語彙、音韻論などの分野における言語変遷に関する基礎研究の一般的な問題、事例研究、パイロットプロジェクトが扱われる。

今回このセクションに工藤さんと私が応募して発表することになったので、それに向けて、IVG について紹介し、ふたりがこれまでの研究を踏まえてどのような発表を行なう予定であるかを事前に報告するのが、このマルジナリアの趣旨である。

２．これまでの私の研究

中高ドイツ語（Mhd.）期はドイツ語が文法体系を整える途上にあり、いわゆる文法化（Grammatikalisieren）が進んだ時期である。しかし他方では古い表現形式も生きており、詩人たちにはさまざまな表現の可能性が開かれていた。詩人たちは彼らの美的世界を、詩行のリズムを整え、叙事詩においては行末を２行ずつ同じ強音で協和させつつ簡潔に描出すべく、これらの表現の可能性を大いに利用した。例えば、時制体系については元来ゲルマン語には現在と過去のふたつしかなく、これらが幅広

く用いられるとともに、ge- をはじめとする前綴りを付けることによってニュアンスの違いを表わしていた。ge- が現在形に付けられると今日の未来に、過去形に付けられると今日の過去完了にほぼ相当するとされた。しかしそれだけでは微妙な時の区別をするのは無理であったので、次第に haben や sîn（nhd. sein）などの助動詞を用いた複合時称が浸透してきた。

また、接続法にも多様性が見られる。接続法にはまだ本来の接続する機能が残っており、それは上位文に接続する従属性を表わし、上位文との時制の一致があった。つまり、元来は主文が現在の時は接続法も現在、主文が過去の場合は副文も接続法過去であった。しかし副詞などから従属接続詞が独立するにつれて文の従属関係はそれらによって表わすことができるので、接続法はその他の機能により多く用いられ、接続法現在が間接話法や要求話法として、過去が非現実話法として区別されるようになる。そしてその時制も完了の形で過去を表わす今日の接続法第一式と第二式の用法へと次第に移行しつつあった。

Mhd. 期の古い表現形式をいくつか挙げてみると、先ず、次の例の下線部に見られるようにひとつの文成分が前と後の文の中間に置かれ、前後ふたつの文に共通して用いられる共有構文（apo coinu）がある。

er beslôz mit armen <u>der schœnen lîp</u> vil süezelîch er kuste.

（Kudr. 483, 4）

彼はその美しい人の身を抱きしめ、大変優しく接吻した。

次に、本来は全面否定ではない wênec（nhd. wenig）や lützel（英語の little に相当）を否定の代わりに用いたり、grôz を niht klein で言い換えたりする曲言法（Litotes）がある。今日の tun に当たる tuon も助動詞や代動詞として多様に用いられた。また、現在分詞が本来の継続の意味なしに sîn や werden とともにその動詞の人称形の代わりをしたり、不定詞もそれ自体ほとんど意味のない beginnen, pflegen, kunnen（nhd. können）などと組み合わせて、同じく単独の動詞の代わりをする迂言的用法が広く行われた。

迂言的表現と言えば、dinc, êre, liebe, geschiht, gewin, hant, kraft, lîp,

name, teil, zil などの名詞が、それ自体ほとんど意味なしに他の名詞や人称代名詞、さらに人名の２格などとともに、本来は２格形で添えられる名詞を単独で１格や４格で用いる代わりの用法も非常に多く見られる。これらは多くの場合、詩行のリズムを整え押韻するためであった。

語形に関しても多様な形が見られる。とりわけ haben が hân に、lâzen が lân に、legen の人称形 leget が leit に、ligen の人称形 liget が lît に短縮するような、いわゆる縮約形が Mhd. の諸作品に頻出する。

縮約とは有声閉鎖子音 b, d. g および気音 h が母音の間で消失し、その結果２音節が１音節に収縮する現象であり、この音韻変化は古高ドイツ語（Ahd.）期にアクセントのある母音 -i- の前でのみ起こった。例えば -egi- と -igi- の組み合わせではしばしば母音間の -g- が -j- 音に口蓋化し、次の母音 -i- と融合して -egi- は -ei- に複母音化し、-igi- は -î- に短母音化した。口蓋化ではないが、-ibi- と -idi- の組み合わせでも -î- への縮約が生じることがあった。

このような縮約形は12世紀中葉から押韻文学の開花とともに急速に広がり始め、他の音韻の組み合わせでも生じるようになった。例えば -age- が -ei- に、-abe- と -ade- が -â- に短縮し、saget が seit に、schadet が schât などに縮約することがあった。

2006年にそれまでの私の研究の中間的決算として『中世ドイツ叙事文学の表現形式 ── 押韻技法の観点から ──』（近代文芸社）を上梓した。それは、上で見たような諸現象を、一語で表わす代わりに複数の語によって言い換えるいわゆる迂言表現（Umschreibende Ausdrücke）と押韻のための様々な語形の２部構成で、Mhd. の押韻文学、とりわけ叙事作品に見られる言語的特徴を様々な観点から考察したものであった。

そこで扱った主な作品は Mhd. の英雄叙事詩の代表作『ニーベルンゲンの歌』（*Nibelungenlied*）、宮廷叙事詩からハルトマン・フォン・アウエ（Hartmann von Aue）の『イーヴァイン』（*Iwein*）、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ（Wolfram von Eschenbach）の大作『パルツィヴァール』（*Parzival*）、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（Gottfried von Straßburg）の『トリスタン』（*Tristan*）および格言詩のジャンルからトマジン・フォン・ツィルクラリア（Thomasin von Zirclaria）の『イタリアの客人』（*Der Wälsche Gast*）であり、時に、Ahd. からオトフリト（Otfried

von Weißenburg）の『総合福音書』（*Evangelienbuch*）およびタツィアーンの古高ドイツ語訳福音書にまで言及した。そしてその後も同じ問題設定で Mhd. の作品および語形の対象を広げ、ドイツの Sprachwissenschaft 誌をはじめいくつかの雑誌に研究の成果を発表してきた。

3．ワルシャワでの発表

ポーランドにおける今回の報告ではそれらの成果の上に、さらにフランス語からの Mhd. による散文の翻訳である『散文ランツェロット』（*Prosalancelot*）および初期新高ドイツ語（Frühnhd.）にまで調査の幅を広げる。亡き妻を悼む夫と擬人化された死との論争詩である宗教的作品、ヨハネス・フォン・テーペル（Johannes von Tepl）作『ベーメンのアッカーマン』（*Ackermann aus Böhmen*）、さらにマルティン・ルター（Martin Luther）の『卓上演説』（Tischreden）を調べることによって、中高ドイツ語の表現形式の特徴をより明確にするとともに、Ahd. から Mhd. を経て Frühnhd. に至る言語変遷をたどるつもりである。

具体的には、haben, lâzen, legen, ligen, sagen などの縮約形についてこれまでの研究の上に新たな調査結果を併せて示し、さらに、今日もっぱら使役の助動詞として用いられる lassen（mhd. lâzen）の本動詞と助動詞の用例数を比べ、その歴史的変遷をたどる。また tuon と machen の用法について個別作品の数と押韻数を示して両語の使用頻度の変化を明らかにする。これまでの考察において筆者は Mhd. で tuon が多用される理由を、語形が多様であり押韻に便利なことだと推論しているが、次ページの表から見てとれるように、押韻に無縁の散文作品である『アッカーマン』で machen の割合が比較的多くなっているところからもその推論が正しいと思われる。これをさらに『散文ランツェロット』とルターの『卓上演説』を調べることによって正確に証明できると期待している。

縮約形についても『アッカーマン』には haben からの hân と gegen が短縮した gên 以外には極端に少なく、これまでの調査では begegenet が収縮した begeint 1 例しか見られない。しかも、その形は一つの写本にのみ現れるものである。すでに『散文ランツェロット』でも縮約形は haben に対する hân や hânt, gegen に対する geyn などがわずかに見られ

	[ge-] tuon (davon im Reim)	[ge-] machen (davon im Reim)
Tatian	359	0
Evangelienbuch	527 (182=34.5%)	18 (9=50%)
Nibelungenlied	544 (369=67.8%)	6 (0)
Hartmanns 5 Werke	747 (348=46.6%)	75 (12=16.0%)
Parzival	605 (307=50.7%)	58 (9=15.5%)
Tristan	495 (311=62.8%)	63 (25=39.7%)
Ackerman	40	14

るものの、韻文作品で縮約形が多く用いられる語の大部分は本来の形であるようである。今後これらの作品を精査し、正確な用例数を導き出せば、Mhd. 諸作品に見られる、脚韻文学なるが故の言語的特徴を確認することができると確信している。